

## キュウリ根こぶ線虫病の薬剤防除(1)

藤川 隆・富来 務・佐藤俊次  
(大分県農業技術センター)

FUJIKAWA, T., TOMIKU, T. and SATO, S.

Effect of various Insecticides on the Cucumber Root-knot  
Nematode Disease.(1)

根こぶ線虫病の薬剤防除はD-Dなどのくん蒸剤が使用されてきたが、処理後植付けまでの期間が長かったり、また処理方法が繁雑であるなど実用的な場面において問題があった。そこで筆者等はこれらにかわる新薬剤の検討と播種時の薬剤処理を主体に若干の実験を行なったので、その結果の概要を報告する。本研究を行なうにあたり種々御教示いただいた九州農試線虫研究室後藤昭室長並びに当センター富永信所長に感謝の意を表する。

## 1. 播種前の薬剤処理

実験1：1,968年6月18日にネコブセンチュウの被害土壌をワグネル5,000分の1a鉢に4kg入れ、粒剤と粉剤は深さ10cmの土壌とよく混和し、その他は深さ10cmに注入後新聞紙で十分に被覆し、ガラス室においた。6月25日と29日にガス抜きをなし、7月5日に昇汞消毒した四葉キュウリを1鉢10粒播種した。その後の管理に注意し、7月25日に寄生程度を調査した結果は第1表の通りである。

第1表 キュウリ根こぶ線虫病に対する薬剤の効果(1,968)

供試薬剤	1鉢当り 薬量 (g)	ネコブ寄 生指数 (%)	薬害
1. ネマモール粒剤30	0.6	55.8	—
2. E D B 粒剤60	0.6	10.0	—
3. テラクアーP粒剤3	0.6	10.5	—
4. ネマナックス粒剤20	0.6	2.2	—
5. カヤエース粉剤10	2.0	9.2	—
6. ネマホルン	1.0cc	5.2	—
7. ネマモール乳剤80.10倍液	1.0	33.3	—
8. ネマナックス乳剤80.10倍液	1.0	3.3	—
9. E D B 油剤30	1.0	2.5	—
10. D - D 55	1.0	1.9	—
11. クロールピクリン99	1.0	39.2	—
12. N C S 50	1.0	0	十～H
13. 標準無処理		61.7	

(注) 1. 供試個体数は1鉢10本、3区平均

2. 寄生指数は土壌病害虫対策実施要領による。

## 2. 播種時の薬剤処理

実験2：被害土壌を5,000分の1a鉢に入れ、実験1に準じて、1,969年6月18日に第2表に示す薬剤処理と四葉キュウリの播種を行ない7月21日に寄生程度を調査した結果は第2表の通りである。

実験3：実験2同様にして1,969年9月18日に薬剤を処理したのち、四葉キュウリを播種し、10月5日調査を行なった。その結果は第2表の通りである。

第2表 キュウリ根こぶ線虫病に対する薬剤の効果(1,969)

実験回次 調査項目 供試薬剤	実験2		実験3		薬害
	1鉢当り 薬量	ネコブ 寄生指数	1鉢当り 薬量	ネコブ 寄生指数	
1. テラクアーP粒剤	(g) 0.6	(%) 21.8	(g) 0.6	(%) 25.0	—
2. ダイアジノン粒剤	0.6	31.5	0.6	57.3	—
3. バイジストA粒剤	0.6	35.6	0.6	53.3	—
4. ダイシストン粒剤	0.6	66.7	—	—	—
5. ランネート粉剤	0.6	28.8	0.6	10.8	—
6. ランネート水溶剤	—	—	0.3	7.5	十～H
7. バダン水溶剤	0.3	31.8	0.3	48.3	—
8. カヤエース粉剤	1.0	27.3	0.6	74.2	—
9. ネマモール粒剤	0.6	37.6	0.6	77.5	十～H
10. ネマナックス粒剤	0.6	0.8	0.4	5.8	—
11. 標準無処理		72.0		70.4	

(注) 供試個体数、ネコブ寄生指数は第1表と同じである。

## 3. 総括

(1) 播種前処理の結果ではD-Dなど従来から使用されている殺線虫剤とともにカヤエース粉剤、さらに有機燐剤であるテラクアーP粒剤の効果がたかく、ネマモール粒剤や同乳剤よりむしろ有望であった。NCSは薬害のため発芽および生育が劣った。

(2) 各種殺虫剤を用いて播種時の薬剤処理を行なった結果、ネマナックス粒剤がたかい効果を示し、また播種前同様テラクアーP粒剤とメソミル剤のランネート粉剤もかなりの効果が認められ、施用量及び施用方法などについて検討を加えれば、ネマナックス粒剤同様に実用効果が期待出来ると思われる。なお薬害には十分注意する必要がある。